

テーマ 『御文章』

『御文章』は、八代宗主蓮如上人が、全国のお弟子さんやご門徒方へ消息（手紙）として発信した仮名書きによる法語です。元々は、「御文（おふみ）」といい、本願寺派では十四代宗主寂如上人以後「御文章」といわれるようになりました。

大谷派では今でも「御文（おふみ）」といい、興正派では「御勧章（ごかんしょう）」と呼んでいます。その他には「宝章」「勧章」ともいわれてきました。

御文章は、蓮如上人が四十七歳の時から書き始められ、八十五歳でご往生される四ヶ月前まで書き続けられました。その数はじつに二百数十通にもほります。

蓮如上人がご往生の後、孫である圓如上人が、二百数十通の御文章の中から八十分通を選び、五帖（冊）に編集した物を『帖内御文章（じょうないごぶんしょう）』といいます。伝えによると十一歳から全国に散らばっているお手紙を集め始めて、三十一歳でついにその編集を終えられますが、その五時間後にご往生されたといいます。

そのうち、一帖目から四帖目には日付があるものを年代順にならべてあり、五帖目には日付が不明なものをまとめてあります。そのため、四帖目の最後、第十五通「大坂建立章」は、蓮如上人の真筆では最後の御文章ともいわれています。

一帖目は十五通、二帖目も十五通、三帖目は十三通、四帖目は十五通、互帖目は二十二通となっています。この全八十通のなかから抜粋した二十三通（八ヶ条本）と二十四通（六ヶ条本）がもっとも多く全国の寺院やご門徒に普及されています。

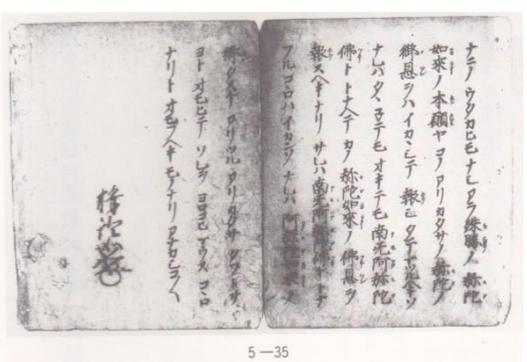
これを著された背景には、御文章を書き始められた本願寺の衰退、他宗の念仏に對して親鸞聖人の示された教義安心を正す目的がありました。

また、人々の現実の苦しみ悲しみをご覧になり、浄土真宗を広めることが何より大切なことだと思われたのです。

なぜなら、御文章を書き始められた寛正二年三月は「長祿・寛正の大飢饉」の年で、ことに三月は都に餓死者があふれた頃でありました。ある記録では、全国で三分の二の人口が減ったとされています。多くの老若男女の悲嘆に涙して筆をとられたのです。しかもその年は、宗祖親鸞聖人の二百回大遠忌法要の年で、今こそ本当に全ての命が救われゆく浄土真宗の再興を想われたのでした。

これによって、浄土真宗の教線は全国に大きく広がり、本願寺も大きくなっていききました。そこで、今では蓮如上人を「中興の祖」と申し上げるのです。

妙好人と称されたご門徒は、この御文章の影響を大きく受けています。近代では、近江商人や福沢諭吉翁がこれにあたります。



以上

